

晴れ間の散歩：雑感 (2021/5/31)

散歩人

九州や東海では、もう梅雨入りをしている。統計開始以来 1 位、2 位になるような異例の早さのだという。一方、関東甲信から東北では、度々雨は降っているもののまだ梅雨入りをしていない。

気象庁では梅雨入りの定義を決めておらず、「平年の梅雨入り前後に、晴れが続いた後、週間天気予報で雨や曇りの日が続くと予想されるときに『梅雨入りしたとみられる』と発表します」。したがって、梅雨入り発表は、暫定的なので後で変更する、あるいは梅雨入り発表を取り消すこともあるそうです。

ここ最近では、小雨、大雨の合間に太陽が顔を出しますが天気予報は余り当たらない。先日(5/26)の赤銅色に光るスパームーン皆既月食の観察も多いに期待される天気予報でしたが、関東では雲がかかり見られませんでした。また、昨夜(5/28)は、コロナの緊急事態宣言が来月 20 日(五輪開催の 1 か月前)までの延長が発表されました。東京オリンピック・パラリンピックに関しては、その開催中止の声が強まっていますが、菅首相からはその開催可否の判断基準は示されていません。

ムービング・ゴールポスト(Moving the goal posts)という言葉があります。サッカー等の競技から派生した隠喩で、「交渉ごと、とりわけ外交において、折衝を進めているさなかに合意基準や条件を(こっそりと一方的に)変更するさま」、「相手側が、話を取りまとめるために妥協や歩み寄りを行った後に、さらに条件を追加して要求してくるさま」を言います。政府には何が何でも五輪を開催したいがために、その開催判断基準(ゴール)を動かしたい意図があるように思われます。

緊急事態宣言の終了基準や五輪開催可否の判断基準などのゴールが示されないままの私たちの我慢生活には限界があり、厳しく守るのも難しくなります。

明るい見通しが余り得られないこのごろですが、たまの晴れ間の散歩は癒しになります。先日は雨があがった午後遅くの晴れ間に智光山公園に行ってきました。HP 掲示板に、「バラ園のバラは、長雨で花がダメージを受け、花穂を切り取った」と書き込みがあり。同時に、「菖蒲園の菖蒲が 2-3 本咲いていた」との書き込みも。数日が経ったので、菖蒲の花数の増加を期待して。結果は、20-30 本にはなっていましたが、まだまだ少ない状況。それでも、いろいろな色模様の花があり、それぞれ精一杯の活きを感じられるのです。「何がゆえにその色模様である必要があるのか？」といったものの問が湧いてきますが、考え始めると頭疲れをしますので遠くに押しやっておきます。愛でに来た散策者は、遠くの 3-4 人のみでとても静かです。



菖蒲（智光山公園にて）

菖蒲園の散策路すぐ横の雑木林から、小鳥のとても大きな囀（さえず）り声が聞こえてきました。その音色はとても豊かです。その方向に目を凝らして探すと、4-5m 先の中枝にスズメの2倍ほどある大きな茶色の後ろ姿を発見（右の写真参照）。首を左右に振りながら自慢の美声で囀っています。急いで持参のカメラを取り出してパチリ。すぐに飛び去らなかったののでゆっくりと構えて撮ればよかったのですが、いささかの興奮で…。囀り声（写真下にリンク）は、同行していた相棒がスマホ録音しました。豊かな囀りですよ。



ガビチョウ（智光山公園にて）

[囀り声（25s）](#)

大きな囀り声と眼の周り及びその後方に伸びた白い眉状の模様が特徴です。帰宅してインターネットでその名前を調べました。「ガビチョウ（画眉鳥）」でした。調べると、かわいいどころか下記のように「害鳥」扱いになっておりビックリです。

ガビチョウ（画眉鳥）

かなり大きな音色で美しく囀る。ウグイスやキビタキ、オオルリ、サンコウチョウといった他種の囀りをまねることがある。中国では非常にポピュラーな飼い鳥で、囀りを楽しむため広く一般的に飼われています。日本でも 1970 年代の飼い鳥ブームに乗って大量に輸入され、中国と同様に囀りを愛でるため飼われていたが、1980 年代以降は人気がなくなりペットショップの店頭から姿を消し、大音量のさえずりや農作物の食害により害鳥となった。大量の在庫を抱えたペット販売業者が始末に困って遺棄（放鳥）に及んだ個体が少なからずあると見られる。外来生物法で「特定外来生物」に指定されており、日本の「侵略的外来種ワースト 100」で取り上げられた鳥類 4 種内の 1 種になっている。

和名「ガビチョウ」は、中国名の漢語表記「画眉」を日本語読みにして、チョウ（鳥）を付け加えたものです。中国語「画眉」は、「塗った眉」の意味で、眼の周りにある眉状の模様から名付けられています。

前述のガビチョウの特定に、スマホソフト「[Google レンズ](#)」を利用しました。目の前にあるもののスマホ画像から、見た目が似ている画像や関連するコンテンツをインターネット上で見つけて、結果を返してきます。植物や動物の種類の特定は、その一応用です。情報処理に関して、今日のホットな話題に AI 顔認識技術があります。現行の顔認識技術では、白人男性と比べて肌の色の濃い人や女性の認識精度が低いことが指摘されています。そうしたなか昨年 1 月ミシガン州で、顔認証 AI によって黒人男性が誤認逮捕される事件が起きました。写真は自分ではない、全然似ていないと本人が否定したにもかかわらず、30 時間にわたって拘束されたという。権力機関が顔認証技術を自由に使うようになれば、本人の主張より AI を信じることで、こうした冤罪は飛躍的に増える可能性があるのです。

新型コロナウイルスの PCR 検査や抗体検査において、陽性でないのに陽性反応が出た「偽陽性」や、陰性と出たのに実は陽性である「偽陰性」が含まれます。その比率と確度に応じた対応が必須である……という話は、ニュースなどで耳にします。AI による認識も同じように「偽陽性」が含まれるのです。その比率をどう評価するのか、その場合にはどう扱うのか、そうした指針が存在しないと、AI を正しく使うことはできません。しかし、そこまでの議論がまだ十分に進んではいないようです。

AI 認識技術の多くの応用分野では、その認識性能は人間よりもかなり高くなっています。一方、人間が誤認識した場合の対処方法は確立され、効率よく処理されているのでしょうか？ 現況の民族間紛争や人権などの社会問題においては、その認識基準ですら共通化されていないのです。「人間は、社会の構成員として賢くなってきているのだろうか？」とさえ心配になります。歴史に学べと言われているけれども、…。